

令和 2 年 7 月 6 日現在

機関番号：33704

研究種目：若手研究

研究期間：2018～2019

課題番号：18K13293

研究課題名（和文）中学生の相談行動における教師の働きかけの影響プロセスの解明

研究課題名（英文）Influence of teacher's questioning and help-seeking practices on help-seeking for junior high school students

研究代表者

後藤 綾文（Goto, Ayafumi）

岐阜聖徳学園大学・教育学部・専任講師

研究者番号：90708447

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 2,100,000円

研究成果の概要（和文）：本研究の目的は、教師に相談することを促すような教師の働きかけ、生徒同士で相談することを促すような教師の働きかけ尺度を作成し、教師の働きかけの効果を検討することであった。中学生に質問紙調査を行い、これら2つの教師の働きかけが学級風土を媒介して、教師への援助要請および生徒同士の援助要請に影響を及ぼすことを明らかにした。さらに、教師自身の援助要請スタイルとこの2つの働きかけとの関連があることが示された。生徒のもつ有能感によって効果的な教師の働きかけが異なることが示されたことから、生徒それぞれの特徴をふまえた働きかけの必要性が示唆された。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究では、個人の周囲に存在する教師からの働きかけに着目し、教師への相談行動だけでなく、生徒同士の相談行動までも教師が働きかけることで促進できることを明らかにする点が、国内外でこれまでに見当たらない先進的な研究である。教師の働きかけとは、授業や学校生活の中で教師が生徒個人に声かけをしたり、学級全体に伝えたりする具体的な行動や応答を取り上げている。教師と生徒との日常的な関わりを通して相談意欲を高め、教師に相談しやすい、生徒同士で相談しやすい学級づくりにも活かすことのできる有用な知見であるといえる。

研究成果の概要（英文）：This study identified the effect of teachers' questioning and help-seeking practices. This was a questionnaire-based study that revealed the more the students perceived the teacher's promotion of students' questioning and help seeking, the more the students tended to perceive the classroom climate as positive and report higher level of help seeking intention. To examine teacher's cognition and evaluation by themselves, I did next study for teachers. Teachers answered the questionnaire that examined the correlation between teacher's help-seeking styles and teacher's practice. And I did next research for junior high school students. In this research, the effect of teacher's practice was changed depend on student's competence about study and friendships.

研究分野：臨床心理学

キーワード：相談行動 援助要請 教師の働きかけ 中学生

様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19 (共通)

1. 研究開始当初の背景

2015年度「児童生徒の問題行動等生徒指導上の諸問題に関する調査」では、中学校において不登校生徒が131,807人となっており、在籍者数に占める割合は2.83%であると報告されている(文部科学省, 2017)。不登校の理由として「『学校における人間関係』に課題を抱えている」という回答項目があり、なかでも「いじめを除く友人関係をめぐる問題」が70.9%と突出している。これはどの生徒も抱えやすい悩みであるため、悩みを抱えた生徒たちをチーム学校として対応することが喫緊の課題といえる。

中学生にとって、他者へのサポートを求めることは有効な対処方略であることが示されているが(三浦・坂野, 1996)、思春期にあたる中学生の時期は他者に相談することに抵抗感が高いことも指摘されている(Eisenberg, 1983; Boldero & Fallon, 1995)。先行研究では、自分では解決できない悩みを抱えた際に、相談できる・できない個人が持つ内的な要因が注目されてきた。一方で、相談することは周囲の他者や環境という社会的要因による影響を受けていることが指摘されてきている(Karabenick, 2004; Marchand & Skinner, 2007)。いじめ被害について、中学生は周囲の生徒や教師がいじめに対して許容的であると感じている生徒ほど、相談を控えることが示されている(Williams and Cornell, 2006)。中高生が深刻な悩みを抱えていたとしても、ソーシャルサポートを認知している者ほど実際に相談に至っていることが指摘されている(Pisani, et al., 2012)。これらの研究から、中学生の相談行動を促すためには、自身の相談行動に対して受容的、肯定的な他者や環境の存在が重要な要因であると考えられる。

本研究では、中学生が相談しやすい環境を考えていくため、彼らにとって身近な学級に関わる社会的要因に焦点を当てることとする。相談することに抵抗感のある生徒であっても相談しやすい学級を教師がつくっていくことはできないだろうか。本研究では、中学生の相談行動を促す教師の働きかけを捉え、その効果を検討する。

2. 研究の目的

本研究の大きな目的は、教師 生徒間の相談と生徒 生徒間の相談を促す教師の働きかけにより、相談意欲が高まる影響過程を明らかにすることである。

相談行動の中でも学習面については、授業中における教師への相談(質問)を促す教師の働きかけによって、相談(質問)意欲が高まるということがいくつかの研究で指摘されてきた(Butler & Shibaz, 2008; 2014)。それを援用し、学習面だけでなく心理面の悩みも含めた、生徒から教師への相談(教師 生徒間の相談)を促す教師の働きかけを明らかにする。さらに近年、教師が生徒に対して情緒的で支援的な働きかけをしていると、その教師の働きかけが学級ですべき行動のモデルとして捉えられ、生徒たちが他生徒に同様の行動をとることが示され始めている(Gest & Rodkin, 2011; Luckner & Pianta, 2011; Meece et al., 2006)。これより、生徒同士の相談(生徒 生徒間の相談)を促す教師の働きかけも明らかにする。

3. 研究の方法

(1)教師 生徒間の相談を促す教師の働きかけと生徒 生徒間の相談を促す教師の働きかけ尺度の作成とその効果の検討

先んじて研究1-1の調査を実施し、2018年度にはその調査結果の分析を行った。中学生を対象に、2つの教師の働きかけの尺度を作成し、学級風土と教師への相談意欲、生徒同士の相談意欲との関連を検討した。研究1-2では、2つの教師の働きかけ尺度と適応感との関連を検討するため、質問紙調査を行った。

研究2では、研究1で示された教師の働きかけが生徒の認知するものとして捉えていたが、教師自身が実際にどの程度行っているのか確認すべく、教師を対象にした調査を行った。

研究3では、中学生を対象に、生徒 生徒間の相談を促す働きかけと学習面の自律的な相談行動および依存的な相談行動との関連を検討するため、質問紙調査を行った。

4. 研究成果

(1)教師 生徒間の相談を促す働きかけと生徒 生徒間の相談を促す働きかけ尺度の作成と2つの教師の働きかけ尺度の効果の検討

研究1では中学生を対象に質問紙調査を実施した。そして、学級風土と教師への相談意欲、生徒同士の相談意欲への影響を検討した。先行研究をもとに、質問項目を作成し、教育心理学を専門とする研究者と筆者を含む2名で各項目について概念に照らし合わせて適切であるかどうか検討し、内容的妥当性を確認した。中学生を対象に質問紙調査を行い、本研究の尺度が一定の妥当性と信頼のあるものであることを確認した。教師 生徒間の相談を促す働きかけ尺度と生徒

生徒間の相談を促す働きかけ尺度はともに全15項目となり、1因子構造が確認された。そして、生徒の認知レベルでは、この2つの教師の働きかけが学級風土を媒介して、生徒の教師に対する相談意欲と他生徒に対する相談意欲を高めることが示された。教師に相談することを促すような教師の働きかけは、直接的に、生徒の教師に対する相談意欲を高めていた。学級レベルでは、この2つの教師の働きかけが、生徒の教師に対する相談意欲と他生徒に対する相談意欲を高めることが示された。今回、学級風土は学級内で相談を行いやすい学級であるかという視点で測定している。そのため、教師の働きかけ、学級風土ともに、生徒の周囲にある社会的要因であるといえる。日常的な教育指導の中で、生徒が相談しやすい雰囲気や環境をつくることの重要性が

示されたと考えられた。

(2) 中学校教師の相談行動スタイルと教師 生徒間の相談を促す働きかけおよび生徒 生徒間の相談を促す働きかけの関連

研究1では生徒の認知する教師の働きかけを捉えることができたといえる。一方で、教師が行っていないから生徒が認知していないのか、教師が行っているけれども生徒が認知しにくいものであるのかという課題も考えられた。そのため、教師を対象とした調査を行い、2つの教師の働きかけを日常的にどのくらい行っているのかを尋ね、また教師自身の相談行動スタイルとの関連を検討した。

Table 1 教師の働きかけと教師の相談行動スタイル間の関係数

	1	2	3	4	5
教師 生徒間の相談を促す働きかけ					
生徒 生徒間の相談を促す働きかけ	.59 ***				
依存的相談行動スタイル	.27	.34 †			
回避的相談行動スタイル	-.08	-.32 †	-.17		
自律的相談行動スタイル	.00	-.02	-.53 **	.12	

** $p < .001$, * $p < .01$, † $p < .10$

教師の教職経験年数を15年以下と15年以上に区切って2群に分け、経験年数が長い群と経験年数が短い群の2つの教師の働きかけの実行頻度を比較した。その結果、教師 生徒間の相談を促す働きかけについては、経験年数が長い群の方が実行頻度を高く回答していた ($t(29)=-2.34$, $p<.05$)。一方で、生徒 生徒間の相談を促す働きかけについては、経験年数による実行頻度の差は見られなかった ($t(30)=1.01$, $n.s.$)。次に、教師自身が悩みや問題を抱えた際に、自分取り組むことが可能でも安易に相談する(依存的)、自分で一度考えてから解決できない場合に相談する(自律的)、悩みや問題の程度にかかわらず一貫して相談しない(回避的)という3つの相談行動のスタイル(永井, 2013)のうちのどのスタイルをとるのかと、教師の働きかけとの関連を検討した(Table 1)。その結果、依存的相談行動スタイルを持つ教師は、生徒 生徒間の相談を促す働きかけを行う傾向があること、回避的相談行動スタイルを持つ教師は、生徒 生徒間の相談を促す働きかけを行わない傾向があることが示唆された。

2つの教師の働きかけは、6件法により実行頻度を回答してもらい、中央値がどちらも4点以上であった。教師自身としては日常的に実行していると認知している働きかけを捉えた尺度であると考えられる。ただし、教師が働きかけていると思っても、生徒には届いていない可能性もあるため、今後は担任教師とその学級の生徒たちの双方からのデータを収集し、教師自身の認知と生徒の認知とに乖離があるのかを明らかにする必要がある。

(3) 生徒 生徒間の相談を促す働きかけと学習面の自律的な相談行動および依存的な相談行動との関連

これまでの研究により、教師の働きかけが中学生の相談行動に及ぼす影響を示すことができたものの、十分に示されなかった点がある。どのような生徒が教師の働きかけの影響を受けやすいのか、教師の働きかけを受けた生徒がどのような相談行動を行うのかまでは明らかにできていない。そこで、特に、生徒 生徒間の相談を促す働きかけに焦点を当て、教師の働きかけを受けることで学習面に対して自律的な相談行動を取りやすいのか、それとも依存的な相談行動を取りやすいのか、生徒個人内の影響過程を検討した。生徒の個人要因として、性別と学習面の有能感と社会面の有能感を合わせて検討した。その結果、学習面の有能感だけでなく社会面の有能感もともに高い生徒は、学習面で困った際に自律的に他者に相談することが示された。特に学業的有能感の低い生徒、社会的有能感の低い男子生徒への支援として、教師が生徒同士の援助要請を促すことが有効であることが示唆された。

以上より、本研究で着目した、教師 生徒間の相談を促す働きかけと生徒 生徒間の相談を促す働きかけは、生徒の相談意欲や相談行動に一定の影響をもつものといえる。この尺度では、授業や学校生活の中で教師が生徒個人に声かけをしたり、学級全体に伝えたりする具体的な行動や応答を取り上げている。このように、生徒の相談を促すような教師の働きかけに着目した研究は国内外で見当たらない。教師と生徒との日常的な関わりを通して相談意欲を高め、教師に相談しやすい、生徒同士で相談しやすい学級づくりにも有用な知見であるといえる。具体的な働き

かけの実践動画やパンフレット作成までは達することができなかったが、研究知見を学校現場で活かしてもらえるよう、調査協力校の校長と学年主任に研究結果の報告を行った。次年度以降も調査協力校との研究と実践との連携が続くことから、今後は研究成果をもとにした教職員の研修会の実施を検討していきたい。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計0件

〔学会発表〕 計3件（うち招待講演 0件 / うち国際学会 1件）

1. 発表者名 Ayafumi Goto & Nakaya Motoyuki
2. 発表標題 Teachers' questioning and help seeking practices: The association between classroom climate and help seeking intentions toward the teacher and between classmates
3. 学会等名 International School Psychology Association Conference (国際学会)
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 後藤綾文・中谷素之
2. 発表標題 援助要請風土は学級における友人との学習活動を促進するか
3. 学会等名 東海心理学会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 後藤綾文・中谷素之
2. 発表標題 学習面の援助要請における教師の働きかけの効果
3. 学会等名 日本教育心理学会
4. 発表年 2018年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
---------------------------	-----------------------	----